拂へた、楽より番兵も、一豫て塚原の腕前を聞いて居ります、其の上加勢のある様子に怪乎と傍へは寄りません、唯其の身は「折合ひ候へ折合ひ候へ」と、大きな聲を出して怒鳴り立てる、其のうちに此處彼處より追々集つたる者が数十人、得物々々を携へまして「ソレ、最う斯うなつたら撃ち取れ」と下知を致したる折柄、「エ、イ面倒」と熊吉は、片傍に手頃の松が一本生ねてある奴を之れ幸ひと双手を掛け、ヤッとばかり根拔ぎに致しまして、其樹を持つて眞先に現はれ、大勢の中へ駆け入つて、縱横無盡に振り廻した、此様なものを振り廻されては堪りません、一振りに五人六人と將棋倒しになりまして、バタ〳〵と打ち倒れます、其の間に伴作は小太郎を補けまして、漸く以前忍び込んだる塀際の處まで逃れて參りました、熊吉も忍ち松の樹を投げ棄てゝ飛いて、ド〳〵と其の跡を慕ひ、同じく塀際へ逃げて參りましたが、番兵の蜜は躍れ一人として其の傍へ近寄る者はございません、唯ワイ

〳〵と騒いで居るとのみ、其の間に主從三人は、早くも塀を乘り越しまして、兄弟は又々濠の石垣を傳つて下へ下りようと致しますと、小太郎は暫しと押し止め小太「先づ待て兩人、拙者の肩と腰に緊乎りと捉まれ伴作「若様、マア何分此の濠は餘程深うございます、向ふまで泳ぎ付きますから小太「イヤ〳〵夫れには及ばぬ、身共が之れを飛び越すから伴作「エ、ヲ、夫りやア若様到底駄目です、何分向ふまでは五六間もありますから小太「ゴテ〳〵言ふな、緊乎り拙者の身体に捉まつて居れ」何うあることかと秋山兄弟、左右から肩と腰に緊乎り捉まりました、内方では大勢が、ワイ〳〵喚つて居りますうち小太「エ、イ」と、一聲叫ぶや否や、忽ち三人の身体は中空に飛び揚りまして、七八間もあらうと云ふ濠の向ふへ、ヤンワリと降りました、實に伊豫守義經の、極の浦入艘飛びも斯くやと思はるゝばかり、是れには流石の秋山兄弟も大いに驚きました伴作「若様、貴方はマア全体、何時身体に羽根が生ね

ました小太馬鹿を申せ、是れは乃公が攝州の花隈に於て、三ケ年の苦心をして學んだ天狗飛切の術と云ふのだ」之れを聞いて兄弟の者は、大きに感心を致しました小太「先づ迫手の掛らぬ其のうちに、率ざ來れよ」と、足に任せてドン〳〵と、遁れましたることでございます、到頭其の夜のうちに相州小田原をば後になし、何處ともなく落ち延びて了ひました、されば其の翌日に相成りますると、小田原城は大騒動でございまして、何分昨夜の騒ぎで、死人も三十人ばかりも出來て居りまするし、殊に肝心の囚人は、何うして何處へ落ち延びたか、八方へ手配けを致して吟味に及びましたが、何うも相分りません、依つて終ひには人相書を以て索ねる云ふことに相成つたのでございます、然るに塚原主從三人の者は登間は決して人に顔を合さぬ、人の通はざる山中へ入つて姿を隠し、夜になりまするとと、足に任せて落ち延びると云ふ有樣でございまして、漸う日數を重ね、上總國姉ケ崎と云ふ處まで落ち

延びましたが、此の處に海勝寺と云ふ寺がありまして、其の寺の和尚は塚原家と俗縁のある者でございますから、先づ小太郎は和尚に頼み込んで、茲に三人が隠匿て貰ふことになりました、さて三人の者は落ち延びる途中に於ては、碌々話をすることも出來ませんでしたが、是に於て伴作は、今回の騒動の次第を、涙に暮れて詳しく物語りました、倘は又父の切腹の次第、弟熊吉のことも話しますると、小太郎はホッと太息を吐きまして小太「ア、ー天なり命なり、御父上と云ひ兄上まで、左樣な非業の御最期を遂ばしたと云ふのは、實に悄なき次第である、左りながら汝等兄弟の忠義により、我が身が自由を得たるは此の上もなき悦びなり、汝れ身体自由になる上からは、父兄の怨敵、佐竹彈正左衛門を討たいで措かうか、夫れのみならず汝等の父まで横死を遂げたとは誠に不愧の至りである、返す〳〵も恨み重なる彈正左衛門、殊に熊吉とやら、聊か父兄が受けたる恩に感じ、我が身命を投出しての働

き振りは、實以て辱けない」と、兄弟の功を褒めまして、此の上三人が心を戮せ、屹度仇を報せんと云ふ、其の計略に及んだることでございます、尤も是に於て熊吉は、一旦小太郎と主從の約を結びましたが、後年に越後の上杉輝虎入道謙信公に仕へまして荒小性の一人、秋山輝種と名乘りまして、武勇を天下に輝かしたることでございます、されば三人は海勝寺に暫らく足を留めて時機の到るを相待つて居つたのでございます、ところが此方は北條家、何うしても幽者の所在が分りませんから、今は致方なく、常陸の笠間佐竹彈正左衛門の許へ此の事を報せて遣りました、サアなから彈正「夫りやア何より大變なことが出來た、彼の塚原小太郎ら此の由を聞くと驚いたのは佐竹彈正です、ブル〳〵ッと身慄ひを仕奴が、牢を破つて出たとあれば、忽ち乃公の首を付け狙ふに相違ない、是りやア怪乎り枕を高く寢られんぞ、何うぞ計略を以て彼れを斃ち取りたいものである」と、臣下一同の者にも此の事を言

ひ聞かせまして、段々小太郎の所在を探索させましたが、皆無手掛りかございません、此の上からは手許へ誘き寄せて、彼れを斃ち取らんと、種々樣々に計略を考へましたが、中々此奴奸計に巧みな奴でございますから、早速一計を案出しました、そこで臣下へ向けて、斯樣々々云々に取計らへと吩咐けますると、家來は早く、常陸國鹿島神社の神職の許へ「今般當國の執權佐竹彈正左衛門殿、鹿島神社へ御參詣に相成る」と云ふことを申し遣りました尤も此の鹿島神社の神職は、大杉彌六郎と云ひまするが、此の仁は塚原土佐守の實の弟でございまして、幼少より學問を好み、且つ身体が少し虚弱でありましたから、そこで此の鹿島神社の神職大杉權頭殿の許へ幼少の頃に養子となり、當時では養父の跡目を繼いで、此の神社の宮司を勤め、世の中を靜かに送つて居られるのでございますが今回我が兄土佐守は、飛んでもない疑ひを受けて非業の最期を遂げ、其の上塚原城が沒落したと云ふことを聞き

ましで、實に悲嘆の涙に暮れ、面白からぬ月日を送つて居られますのでございます、どころへ佐竹彈正左衛門の家來が參りまして「明日當國の御執權佐竹彈正左衛門様當鹿島神社へ御參詣に相成る、尤もお昼食は當神社に於て召上ることであるから、宮司に於ては、粗相のなきよう、夫れ〳〵手當を致すが宜からう、此段申し達す」と云ふことでございます、此の使者が立歸りましたる跡で、彌六郎は暫らく腕を組んで考へて居りましたが彌六「ム、、縱へ我れ一旦神官となつて、武門の道に拙きものと云へども、我も塚原一家に生れたるもの、兄を撃ち甥を撃ち、塚原一家の者共を城諸共に亡ぼしたる、大惡無双の曲者、汝れ彈正左衛門、やはか此のまゝに措くべきや」と、忽ちのうちに決心を致しまして、早速奥方のお八重様と云ふのを手許へ招き彌六「さて改めて私は少々お前に頼みたいことがあるが、何と聞いては呉れまいか　八重「ハイ此は改まりましたる其のお言葉、して其のお頼みと云ふのは何事

でございますか彌六「イヤ他でもない、此の大杉の家を今改めて私に呉れることは出來まいか　八重「ホ、、、、是れは又異つた御ございます、貴方は塚原城より當家へ御養子にお出で遊ばしました御身分、素より此の家を御相續遊ばしたる上からは、此の家は貴方の物ではございませんか、縱し妾は生付きの娘にもせよ、女は三界に家なしとやら申しまして、妾が決して此の家の主と云ふのではございません、是れは皆貴方の物でございます、夫れに今改めてのお言葉、妾は一向腑に落ちません彌六「イヤ〳〵、私が此の家を相續して、此のまゝ生涯神官で送るならば、何も改めてお前に貰ふには及ばぬが、實は今度、此の大杉の家を絶さんければならぬことが出來たのだ　八重「エ、ー、ッ、夫れは全体何う云ふことでございますか彌六「實は是れ〳〵斯様々々の譯合……」と、彌六郎は我が心中を物語りまするとと、奥方も中々氣丈な性で　八重「ヤッ御尤もでございます、夫れでは御存分にお遣り遊ばしませ彌六「ム、

早速の承知厚けない、就てはお前が此處に居ては都合が悪いから何うか一時も早く光枝を連れて當處を立ち去き、奥州狐川の甚右衛門の許へ落ち延びて呉れるよう、夫れで我れ一命を棄てるやうなことあれば、汝は何うにか致して、塚原の次男小太郎と云ふ者に索ね會ひ、娘の養育やら萬事頼み呉れるよう、是れは路用と致すべし」と、金子二百兩を手渡しを致しました、そこでお八重殿は早々身支度をして、光枝さんと云ふ娘の手を曳き、家來の山口源太夫、中間の剛藏と云ふ者を供に召し連れ、到頭奥州、狐川へ落ち延びて了はれました、其の跡で彌六郎は、召使ひの下男下女に悉く暇を取らせ、廣き館に其の身唯一人となりました、今は心に懸る雲もなしと、やがて其の翌朝になりまして、十分其の身を潔めまして、裝束を改め、神殿へ出でまして、先づ燈明を点げ一心に祈念を凝して待つ所へ、一素より左樣な手配りのあることを知るや知らずや、笠間の城主佐竹彌正左衛門、行列凛々しく是れへ乘り込んで參りました、此方は彌六郎、豫て神前に納めあつた白羽の矢と弓一流を用意いたし、神前の物陰に潜んだることでございます、其のうちに行列は益々近付いて參りまして、すでに拜殿の處へ彌記を舁き据ゑ、今や彌正左衛門内方より出でんとする模樣なり、時分は好しと彌六郎、弓を滿月の如く引き絞つて、忽ちプツツリ切つて發ちた、其の矢は風を切つて、忽龍の眞中央に發矢と立つた、けれども何の手徹へもない樣子、彌六「オヤッ失敗たり」と、また二の矢を切つて發す、忽龍護衛の武士「ソレ曲者とざんなれ」と、御神前を望んでバラ〳〵駈け付け來つた、大杉彌六郎は無念の切齒をなし彌六「さては我を計りしものであるか」と、弓矢を投げ棄て、腰なる一刀の鞘を拂ひ、寄らば斬らんと身構へた家來、汝曲者、殿樣へ黙して手向ひをなすは不埒な奴、縄に掛れ」と前後左右から撃ち込んで來た彌六「猪牙才千萬なり」と、忽ち近寄る者を左手右手に

斬り倒し彌六「ヤア〳〵夫れへ參つたる、佐竹彈正左衛門正に承はれ、我は當神社の神官と云へ、其の實塚原家の一族なり、兄土佐守を殺されたる其の鬱憤、やはか其のまゝに棄て置くべきや、覺悟をせよ」と駕籠脇へ乘り込まんとする、左はさせじと家來の銘々、前後左右から大勢撃つて掛る、何分此の仁は、弓を持つては百發百中でありまするが、劍術の方は左のみでもございません、殊に彈正左衛門の方では、隙々十分計つたることゆゑ、附き添ふ武士は屈强の者ばかり、到頭彌六郎を取つて押へまして、手に踏縛つて了ひました、そこで早速之れを笠間の城内へ引立てまするとき、先づ庭前へ廻しまして、彈正左衛門は正面の座敷に、緞子の蒲團の上に着座を致して居りましたが、縄付の彌六郎をハツタと睨め付け彈正「コリヤ曲者、顔を上げよ、汝れ鹿島神社の神職であるながら、何恨みあつて此の彈正左衛門に矢先を向けたか有体に白狀に及べ、また近頃行術を暗まし、世を忍んで居る汝の

蜘塚原小太郎勝義の所在を存じて居るであらう、眞直に白狀いたせ彌六「默り居れい彈正、汝我が兄土佐守を、罪なくして撃ち取るのみか、塚原の家名を取潰したる極重惡人、我れ其の恨みを晴さんと致したるに、武運拙なく斯く捕れの身となりしは如何にも殘念、また我が蜘小太郎の行衛は、我れ何條以て知るべき理由のあるべきや、最早や我れ運盡きて斯く捕れと相成つたる上からは、汝に口を利くも穢はし、無益なことを尋ねるな」と、兩眼を閉じまして、此の上何と言つても一言として述べません、そこで彈正左衛門と云ふ奴は鴻大もない惡人ですから、此奴舌でも嚙んで死んではならぬと思ひまして、家來に吩咐け、彌六郎の上下の齒を悉く扱かして了つて、其の上一旦牢へ打ち込み、先づ大杉の許を家宅搜索に及びましたが、小太郎の姿は更に見ねません彈正「然らば此の上からは當初の計略通り、彼奴を手許へ誘き寄せて撃ち取り呉れん」と「來る十月二日、當國鹿島の神官大杉彌六郎なる者

を、笠間の松原に於て、磔の刑罪に充て行ふべきものなり」と記した大いなる建札を、諸方へ出すと云ふことに相成りました、是れ畢竟する、其の當日必らず小太郎が叔父を助けに來るであらうと、斯う云ふ計略でございまして、されば其の當日に相成りますると、笠間の松原に二重矢來を結ひ廻らし、其の中へ大杉彌六郎を引き出しまして、一旦荒筵の上に座らせ役人「コリヤ、顔を上げい、反逆人塚原土佐守の實弟、大杉彌六郎事、汝鹿島神社の神職の身にてありながら、當御領主様に遺恨を挟み、卑怯にも飛道具を以て撃たんと致したる段、甚だ以て不屆きの至り、依つて今日磔の刑罪に行ふものなり」と、其の罪狀を讀み聞せまして、いよ〳〵磔臺に彌六郎を括り付け、すでに大身の槍を以て左右から之れを突殺さんと致す、數万の見物は、深き仔細を知りませんから「何とヤア、恐ろしい仕置もあるものでは、ないか」と、皆々驚いて見て居りまする、こいよ〳〵刑場の露と

あるのは、彌六郎も覺悟でございますが、是れが此のまゝ磔の刑罪に上つて了へば、天道あつて無きが如し、果して此の處へ對して、塚原小太郎が駈け付け來りまするや否や、中すまでもない彈正左衛門の方は、此處へ塚原を誘き寄せようと云ふの計略でございます、素より塚原小太郎は、十分夫等の覺悟を致して、叔父の危難を救はんと、是れへ對して駈け付けて參りますると云ふ、笠間の松原にて大騒動出來のお話、續いて小太郎勝義が、難儀辛苦を嘗めまして、遂に父兄の仇を報ずると云ふ、是れより益々佳境に入つて參りまするが、何分紙數の限りもございまするから、本編は是を以てお預りと致しまして、直ぐ引續いて、次編を「羽賀井一心齋」と表題を下し、本編に演み殘しましたるお話の結局を告げ、夫れと同時に、上泉伊勢守の四天王の一人、羽賀井一心齋の武勇談に引移つて御披露仕りまするから、何卒後編出版の上は、當編は申すまでもなく、前がより演み來りましたる各編と

御照合せの上、相違らせなう、御高評御愛讀の程、是に伏して希ひ置きまする。

日本武術傳

塚原小天狗（終）

明治四十一年七月十二日印刷
明治四十一年七月十五日發行

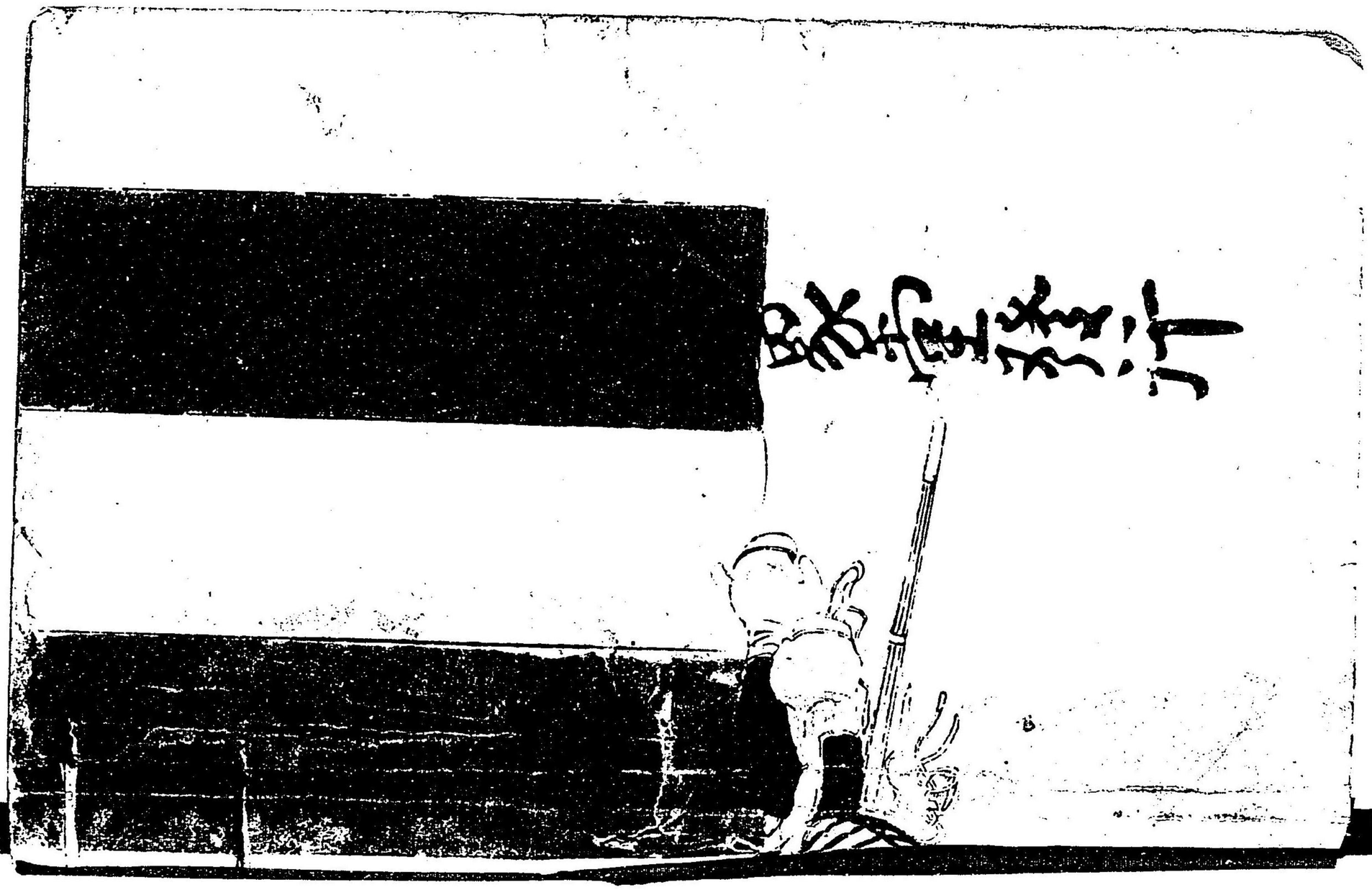
發行人　大阪市南區大寶寺町西之町廿二番地　博多久吉
印刷人　大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地　井下幸三郎
印刷所　大阪市南區心齋橋北詰西へ入　浩進舍

（塚原小天狗奥附）

不複製許

發賣所　大阪市南區大寶寺町佐野屋橋筋西へ入南側　博多成象堂

257
529



097375-000-3

特9-442

塚原小天狗（日本武術伝）

神田　伯竜／講演

M41

DBS-1260